

「帝国建設と熱帯移民の生理学—久野寧の発汗研究を中心に」

鈴木晃仁（慶應義塾大学）

異なった気候風土に移住すると健康が損なわれる現象は、古くから医学に知られていた。一方で、移住からある期間が経つと健康を取り戻す現象も、気候馴化(acclimatization)と呼ばれて、初期近代以降のヨーロッパ人、特にアメリカやインドなどに赴いた人々に知られていた。この二つの現象の概念は、19世紀以降、帝国主義の拡大、人種概念の興隆、熱帯に顕著・特有な病原体の発見などにより、複雑な変化をたどったことが Mark Harrison や Warrick Anderson の研究などにより明らかにされている。帝国の建設は、どの人種が、どのようにして、熱帯の気候と生態系に適応できるかという問題とともに語られていたのである。

昭和戦前期の日本が、大東亜共栄圏建設の構想の下に、「南方」に進出したときにも、大和民族が熱帯で健康を保てるのかということは大きな関心であり不安であった。その問題に解答を与えたのが、名古屋帝国大学の生理学教授で、ノーベル賞候補にもなったことがある久野寧（1882-1977）の発汗の研究であった。久野は、満州医科大学教授時代の1920年代から、人種ごとの発汗調節機能の差異を研究して、日本人が熱帯に適応する能力が高いことを論じた。これは、日本人の南方移民を生理学の視点から正当化する根拠として用いられた。

この報告は、久野の研究とその利用を論じ、戦前・戦中期の生理学とその技術が、当時の社会とどのような関係にあったのかを考察する。